

## 2007年 私の〈真夏の夜の夢〉

青木三郎

人文社会科学研究科文芸・言語専攻教授  
(あおき さぶろう／言語学)

2007年夏、いろいろな経験をした。脈絡がないかもしれないが、夢を語る、ということによって読者諸氏には予めご容赦願いたい。

### 1. 韓国・中国の研究者と

今夏7月5日に韓国日本学連合会学術大会に招聘されてソウルで基調講演を行った。その際に知り合った大勢の韓国人研究者から筑波大学の文系は何の研究・教育拠点形成をしていますか、と質問された。韓国でも日本のCOEや大学院GPのような大型の研究・教育の拠点形成事業を推進している。縁あって日本研究に関する拠点大学のプロジェクトリーダー(高麗大学、漢陽大学等)とも議論をする機会を得た。拠点大学どうしがダイナミックに連携し、東アジア共通の問題に関して共同で研究・教育ができれば、新しいパラダイムが生まれてくるだろうと実感した。8月22日に今度は中国の大連大学で「中・日・韓日本言語文化研究国際フォーラム」にシンポジウムのパネリストとして参加した。その機会に、北京大学、天

津大学、上海大学、吉林大学、浙江大学等々の研究者とも議論する機会があり、中国の文系の拠点形成事業についても異口同音に、その重要性の指摘がされていた。

同会議で、名古屋外国語大学学長の水谷修先生が、中・韓・日を中心として、いつか将来に、100年後であっても、アジアがヨーロッパ連合のような共同体になることを夢見ている、という趣旨のお話をされて、感動した。この夢が実現するためには、お互いを理解する意志とともに、共通の理想をもって、今ある問題に共同で取り組んでいく行動力が重要である。

本学の人文社会科学研究も東アジアを中心に展開するためには、明確な教育・研究拠点形成をやり、組織的に対応する必要があると痛感した。

### 2. カンボジアの学友と

今夏、カンボジア王立プノンペン大学文学部の友人から私信を受け取った。カンボジア人文社会科学振興インスティテュート

の創設企画に参加して欲しいという打診である。1993年までの20年間に渡る内戦で疲弊しきったカンボジアの復興のための人材育成、カンボジアの学問研究のルネッサンスを目指す志の高い企画であった。日本の主要な文献のクメール語への翻訳、クメール語による言語教育、図書館の整備、そのための人材育成を推進しているという。クメール語の文法をカンボジア人自身の手で、カンボジア人の言語教育のために作らなければならない。そのための言語学者の養成。明治時代の大言語学者、上田万年のような人材が、今、カンボジアに必要なのである。思えば日本は20世紀初頭から国家を挙げて日本語を近代化し、標準語(国語)を整備していった。その経験が、今、カンボジアで役に立つはずである。

このカンボジアの企画は、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカの学者が集まって推進している。日本もぜひ参加したいものだ、とつくづく思うのである。

### 3. チュニスの学生と

今夏、チュニスで日本語・日本文化教育サマーセミナーを開いた。本学から沼田善子教授、清登典子教授、渡邊淳也准教授、石塚修講師、小野正樹講師、そして青木が参加し、集中講義を行った。22名の受講生のモチベーションは多様であった。「なまこ」

の有用性を研究しているバイオテクノロジーの学生から、マンガ『デスノート』にはまっている若い男の子まで、興味と関心の幅の広さに驚いた。

清登教授による俳句と連句の丁寧な指導により、初学者ではあるが、チュニジアの学生は、夏の季語にジャスミンの花をとりあげ、カルタゴの遺跡、その物言わぬ歴史を刻んだ石を思い、ハンニバルとサムライの戦場を再現し、魔法のじゅうたんに乗り、天空の彼方に天使に会う。また地中海の青い海を渡り、森陰のフクロウの声に耳を傾け、恋人と手をつなぎ、どこまでも散歩する。そうしたイメージの世界を5/7/5/7/7の日本語の世界に見事に移していった。このような感性は、地中海・イスラーム文化圏の学生には、おそらく共有されやすいものだと思う。そうだとしたら、初級の日本語教科書などにも、柔軟に取り入れていくことが必要ではないか。

このような仕事は、気の遠くなるような基礎作業・データ分析が必要であり、同時に、学生たちとの<血の通った>交流が不可欠である。チュニスの経験は、言語教育と文化教育が、単に教えるだけではなく、教わりながら教える重要性を実感させてくれた。

#### 4. ヒヤリング

チュニスから帰国して、すぐに文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」のヒヤリングの準備にとりかかった。これは夢ではなく、現実的に非常に厳しいものであった。5月に申請した人文社会科学研究所のプログラム「新領域開拓のための異分野融合型教育」のヒヤリングが8月6日に予定されていた。それに向けて、学内リハースルがあった。

このプログラムは人文学と社会科学の融合を中心とした教育プログラムである。教授が学生に新知識を伝授するという伝統的な指導ではなく、学生が抱える問題を意識化・プロジェクト化し、それに合わせて指導体制を作ろうというものである。つまり①多元的な人文系と社会科学系の問題に大学院生が取り組めるような共同指導体制を充実させ、②共同指導教員とともに大学院生がプロジェクトを立てる共同研究参加型教育を行い、③人社系の新研究領域を開拓し、激変する現代社会の要請に応えうる人材を養成しようというものである。

例えば、日本語教育を海外で起動し、運営するまでの実務的研究をしたい場合、既存の専攻領域（応用言語学、日本語学）のカリキュラムでは難しく、事前現地調査（政治、経済、外交、人種、民族、文化等）、国際貢献（企業の誘致、観光事業の活性化、現地

語教育）などの知識が必要になる。このような要請に応えるため、短期語学研修、現地調査（フィールドワーク）などを各自のプロジェクトの必要性に応じて履修する。さらに「プログラム演習」の履修を中心に新領域開拓のための博士論文を執筆する。研究者として極めて高度な実務能力、発表能力、そして教育者としての対話力を養うために、本研究科の50校にのぼる海外協定大学を活用して、「現地調査研究」「国際学会研究発表」「国際インターンシップ」を履修し、実践的語学力、異文化対話力、国際的行動力を備えた、真に独創的な人材を育成する。

このプログラムは9月に採択され、人文社会科学研究所の重要な教育研究拠点形成事業として位置づけられることになった。失敗の許されないプロジェクトである。

#### 5. さいごに…

私は言語学者である。他者の感性を受け入れ、世界の多様性を公平に認識し、異なる個どうしの相互理解を推進すること。これが、私の大学人としての夢の根底である。